ツツバ語の数詞と儀礼

内藤　真帆

愛媛県立医療技術大学紀要 第14巻 第1号抜粋
2017年12月

愛媛県立医療技術大学紀要
第14巻　第1号　P.1-6　2017　　原　著（査読あり）

ツツバ語の数詞と儀礼

内藤　真帆*

Numerals and Rituals in Tutuba

Maho NAITO

Abstract

More than 100 vernacular languages are spoken on the 83 islands of the Republic of Vanuatu. One of them, the Tutuba language, is spoken by approximately 500 people on Tutuba Island. In this language, numbers over 21 are constructed with cardinal numbers with ordinal numbers (e.g., 20 30th 1), though numbers up to 19 are constructed with two cardinal numbers and the word that means “plus” (e.g., 10 plus 9). Since this unique counting method over 21 is different from the reconstructed Proto-Oceanic and most other cognate languages, it implies the language change occurred in the Tutuba language itself.

In this paper, I will first introduce the numeral system in the Tutuba language. Then, I will describe when the numbers are used in the lives of Tutuba speakers. After that, I will show how numbers over 21 are used in the rituals or marriage ceremonies on Tutuba Island and explain the reason why such large numbers are needed at these ceremonies. Finally, I will show the possibility that this unique counting over 21 was developed to meet the needs of traditional rituals that require large numbers.

Key Words：ヴァヌアツ ツツバ語　数詞　儀礼　言語変化

序　　文

ヴァヌアツ共和国は南太平洋に位置し，Y字を成す83の島々から構成される島嶼国である。この国ではオーストロネシア語族のオセアニア諸語に属する100余りの現地語が話され[1)~3)]，それらの共通語として国語であるビスラマ語が機能している。かつてこの国はニューヘブリデスと称され，イギリスとフランスの共同統治下にあった。統治下における公用語および教育言語は英語とフランス語であり，この国が1980年に独立して以降，これに国語ビスラマ語が加わって，英語とフランス語，そしてビスラマ語の三言語が公用語として制定された[4)]。国民の多くは母語である現地語とビスラマ語の両方を話し，さらに英語やフランス語を話す者も多く存在する。人々は同一の現地語を母語とする者とは現地語を用いて会話をし，異なる現地語を母語とする者とはビスラマ語を用いて会話をする。

本論文では，ヴァヌアツ共和国のツツバ島で用いられるツツバ語に焦点をあてる。この言語では21以降の基数が，例えば21であれば，「20　30番目　1」のように基数と序数の組み合わせによって表される。しかしながらLynchらの再建したオセアニア祖語では，21以降の基数に序数を用いることはなく，「20 ＋ 1」のように加算の方法で表される[2)]。こうした基数と序数を組み合わせた数え方は幾つかの近隣言語で報告されているものの，この数え方へと変化した要因については仮説も含めて考察がなされていない。こうした背景を踏まえ，本論文では，ツツバ語の数え方とツツバ文化との相関性を論じ，オセアニア祖語から基数と序数を組み合わせた現在のツツバ語の数え方が発達した可能性を示す。

方　　法

1．先行研究と本研究のデータ

1969年から1974年にかけて，Tryonを含む四人の言語学者がヴァヌアツ共和国の言語や方言を対象に，それぞ

*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

れの言語の基礎語彙およそ300語を調査した。これらを記録したNew Hebrides Languages[3]の中には，ツツバ語の基礎語彙の音声表記も含まれており，筆者のものを除けば，これがツツバ語の唯一の先行研究である。オセアニアの数の先行研究としては，上記の書に記された基数１から10の音声表記のほか，The Oceanic Languages[2]に記されたオセアニア祖語の数がある。これもまた，現在のツツバ語の数が，過去からどのような変化を経て今に至ったかを考察する上で不可欠な先行研究である。

本論文で扱うツツバ語のデータは，筆者が2001年から今日に至るまで定期的にツツバ島でツツバ語話者に調査を行って得られた発話である。ツツバ島では首長家族と寝食を共にして日常会話を収集したほか，儀礼や結婚式で交わされた自然発話やスピーチ，また儀礼で用いられた表現などを収集した。こうした参与観察に加えて，50代の首長や70代の高齢の話者を対象に，過去の儀礼やツツバ文化についての聞き取り調査も実施した。

２．ツツバ語の数

ツツバ語の数には基数・序数・倍数・分配数がある。基数はoal「８」を除き，１から10までがe-tea「１」，e-rua「２」のように，基数であることを示す接頭辞e-と数を示す語基の組み合わせによって表される。基数8を意味するoalがe-oalと表されないのは，ツツバ語がe-oaという音連続を音韻的に許容しないからであると考えられる。１から10がこのように表されるのに対して，11から19は「10 加算 1」，「10 加算 2」のように10を意味する語saŋavulと加算を意味する語doman，そして下一桁の数が続いて表される。例えば11は以下のようになる[注1]。

(1) saŋavul　　doman　　e-tea
　10　　加算　　cdn-1
　「11　（直訳．10　加算　1）」

20，30，40のように，下一桁が０である二桁の数には，それぞれに対応する語が存在する。

(2) ŋavul-e-rua　　(3) ŋavul-e-tol　　(4) ŋavul-e-v̩ati
　10倍-cdn-2　　10倍-cdn-3　　10倍-cdn-4
　「20」　　「30」　　「40」

同様に100，200，300のように下二桁が０である三桁の数にも，各々に対応する語が存在する。

(5) ŋalsaŋavul　　(6) vaa-rua　　(7) vaa-tol
　100　　100倍-2　　100倍-3
　「100」　　「200」　　「300」

上記以外の数，すなわち下一桁が０ではない数は，次のように基数と序数の組み合わせで表される。

(8) ŋavul-e-rua　　ŋavul-e-tol-na　　e-tea
　10倍-cdn-2　　10倍-cdn-3-3sg.poss　　cdn-1
　「21　（直訳．20　30番目　1）」

なお序数は，接尾辞-naが基数に付加して表される。この接尾辞-naは，三人称単数の所有を表す接尾辞と同型である。

(9) e-tol-na
　cdn-3-3sg.poss
　「３番目」

(10) batu-na
　頭-3sg.poss
　「彼の頭」

３．祖語・近隣言語との比較

Lynch，Ross & Crowley[2]は，再建されたオセアニア祖語では，１から10までの基数と一の位が０である二桁以上の数にはそれぞれ対応する語が存在し，おそらく10以上で一の位が０でない数は*ma「加算(and)」を介して表されただろうと述べている。

ツツバ語もこれと同じく，１から10までの数と一の位が０である二桁以上の数にはそれぞれ対応する語が存在する。また同様に10以上で一の位が０でない数にはdoman「加算(and)」が用いられる。しかし先に２.「ツツバ語の数」で示したように，ツツバ語の場合はこの数え方は19までであり，21以降になると基数だけでなく序数も用いられるようになる。この点はオセアニア祖語と異なる。

ツツバ語は北・中央ヴァヌアツグループに下位分類される言語である[1),5)]。このグループに下位分類される言語，特に近隣諸語とは音素・音韻・形態・統語において共通するところが多い。これは数詞においても同様である。しかし21以降の基数表現は，同グループに下位分類される多くの言語とは異なる。

近隣諸語では，基数と序数を組み合わせた表現をせず，基数のみを並置するか，または加算に相当する語を一の位の数と十の位の数の間に挟んで二桁の数を表す。例えばツツバ語と同じ北・中央ヴァヌアツグループに下位分類されるアラキ語では，21は以下のように20と１が並置して表される[6)]。なお，この表現mo gavul dua mo heseは，Araki[6)]の81ページから引用したものであり，そこではグロスは付されていない。

(11) mo gavul dua　　mo hese
　20　　1
　「21　（直訳．20　1）」

中央ヴァヌアツグループに下位分類されるサウスエファテ語では，次の通り十の位の数が10掛ける２のように乗法（掛け算）を用いて表され，その後に加算を表す語atmatと一の位の数が続いて，二桁の数が作られる[7]。

⑿ ralim　inru　atmat　itol
　10　2　加算（and）　3
　「23（直訳．10×2　加算　3）」

序数が現れる点において数え方がツツバ語と同じであるのは，ツツバ語と同じく北・中央ヴァヌアツグループに下位分類される，マヴェア語[8]やタマンボ語[9]などの言語である。特にツツバ島の南西に位置するマロ島で話される言語タマンボ語は，ツツバ語と相互に理解が可能であり，数え方もツツバ語とほぼ同じである[注2]。

しかし，こうした言語の先行研究においては，数え方の報告と具体例が示されたのみで，その背景については仮説も含めて考察はなされていない。

Lynch，Ross & Crowley[2]は，今日の伝統文化から判断するに，10以上の数詞はオセアニアの初期の一部ではさほど使われなくなっていただろうと述べている。また６から９の数は早い段階において５＋１，５＋２のような数え方に変化しただろうと仮説をたてている。これは基礎語彙にあたる数でさえも島嶼または地域文化の影響を受けて変化しえたことを示唆するものである。またツツバ語を含む北・中央ヴァヌアツグループの一部言語には，オセアニア祖語の唇音から発達したと考えられる世界でも希少な舌唇音が存在し，タンゴア語でこれを発音するのは男性に限られるというCamden[10]の発表から，Clark[1]は舌唇音が社会的意味を担っていることは明らかだと述べている。文化や社会が言語および言語変化と密接に関与することを示唆するこれらの先行研究を基に，本論文ではこれまで着眼されていなかった当該地域の数え方の変化について考察を行う。そしてツツバ島で行われる儀礼の分析から，ツツバ語の数え方が文化や心理に依拠してオセアニア祖語から発達した可能性を示す。

結果・考察

１．数が用いられる場面

ツツバ語には1000までの数が存在するが，このように大きな数が日常生活で必要となる場面は少ない。三桁はもちろん二桁の数であっても，家族や親族の人数を言う時に13，17などと10台の数が用いられる程度で，それ以外の場面では稀である。年齢や暦，値段などはツツバ島の伝統的な暮らしにはそもそも存在しておらず，これらは宣教師の到来や，近年の学校教育によって導入されて，その後に浸透したものである。これらは現在ではビスラマ語で表され，それ以外のものに対しては多くの場合，具体的な数ではなく量詞tarina／tari「たくさん」やemrei「いくつか」などが使用される。人々は自給自足の生活を営み，タロイモやヤムイモを栽培しているが，例えばタロイモがいくつ穫れたか，ヤムイモを儀礼のためにいくつとっておくか等の報告や話題においては具体的な数が言及されることはなく，量詞evisasi「少し」やtarina「たくさん」，またこれを順接の接続詞roで繋げたtarina ro tarina「かなりたくさん」などが使用される傾向にある。海亀の卵のように，相当数に上るものについても同様である。つまり具体的数は多くの場合に必要とされず，特に二桁以上の数が日常生活において使用される場面は稀であったと推測される。以下はツツバ語で数詞に代わって使用されうる量詞である。

evui「すべて」
tarina ro tarina「かなりたくさん」
tarina／tari「たくさん」
emrei「いくつか」
evisasi「少し」

いったいツツバ語の大きな数はどのような時に必要であったのか。また，このような複雑な数え方が，英語やビスラマ語に置き換えられることなく使用され続けてきたのはなぜか。

大きな数が必要とされたのは，「かなりたくさん」や「たくさん」などの量詞では情報量が不足という場面であったと考えられる。英語やビスラマ語に置き換えられることなく，特に60代以上の人々にツツバ語のこの複雑な数え方が使用され続けた背景には，彼らの重要視する事象と数え方が密接に関与していたためか，または何らかの理由により数え方そのものが彼らにとって重要であったためであると考えられる。

これまでの参与観察による現地調査および聞き取り調査から，ツツバ語にはそのような場面が二つ存在することが明らかになった。首長任命式と結婚式である。結婚式は新郎新婦とその家族の都合によって式次第が多々変化することから，ここでは首長任命式を例に，数に焦点をあてて説明する。

ツツバ島は首長を頂点とする階層社会であり，首長はツツバ島にある10の村ごとに少なくとも一人は存在する。首長は世襲制であるが，第三者の推薦とツツバ島の全首長の承認によって首長継承者ではない者も首長になることが可能である。この島の首長には10の階位が存在し，より高い階位に就くためには首長任命式においてより多くの豚を殺し，その肉を人々にふるまう必要がある。これは豚が財産であるこの地において十分な財力と寛大

な心を持った首長に足る人間であることを示す手段であり，儀礼で重要視される行為である。

ツツバ島の首長任命式は多くの場合，次の順で行われる。なお以下は聞き取り調査による1985年前後の式の描写であり，著者が参与観察中に参加した2005年の式ではヤムイモ以外に水を運ぶバケツなどの品が贈答されていた。このように贈答品に当世風のものが加わることもあれば，時に新たな行為が加えられたり，また省略されたりということもある。

ヴァヌアツ共和国の豚を殺す行為は，伝統を反映するものであり，数多くの文献に記されている。ツツバ島では，以下に説明するように，参加者数を葉を用いて数えることも含め，儀礼の形態は過去から様々に変容して現在に至っていると考えられる。

① 人々が儀礼の執り行われる広場に集まり始める。ツツバ島は中央に丘が広がり，傾斜の多い地形である。また海岸沿いは樹木が茂り岩場も多く，平地が少ない。そのため儀礼を自宅周辺で行うことが難しい家がある。加えて，電気のない島にとって長時間にわたる儀礼のためには少しでも明るい海辺の方がよい。ゆえに多くの場合，平地がわずかにでも広がる島の両端ヴェオア地域またはホワイトサンド地域で行う。

② 新首長に任命される者の家族は，葉を手に持って広場の入口に立つ。そして参加者が目の前を通るたびに数え，葉に切り込みを入れながら人数を把握する。

③ 現首長の挨拶やヤムイモの贈答後，新首長に任命される者の息子が両手・両足を蔓で結わえられた豚を抱えて現れる。そして石を積み上げて作られたステージの上に豚を横たえる。

④ 新首長に任命される者が豚の眉間めがけて棍棒を振り下ろし，豚を殴って気絶または殺す。

⑤ 気絶した豚は，新首長に任命される者の家へと運ばれ，火で焙られる。

⑥ 現首長と立会い者から新首長の誕生と任命を認める宣言がなされ，新首長が着任の挨拶をする。

⑦ 葉を用いて参加者の数を数えていた者は儀礼会場から自宅へと走り，豚を焙っている家族にその人数を伝える。53人の来客であれば以下のように伝えることになる。

⑬ ŋavul-e-lima　ŋavul-e-ono-na　e-tol
10-cdn-5　10-cdn-6-3sg.poss　cdn-3
「53　（直訳.50　60番目　3）」

⑧ 家族は参加者全員に豚肉を行き渡らせるべく，豚を切ってゆく。肉（赤身）だけでなく，皮のついた脂身（白身）も一切れとして切り分ける。

⑨ 切り分けた肉をバナナの葉に載せ，広場に運ぶ。そして居並ぶ参加者に一片ずつふるまう。

儀礼では，参加者一人ひとりにいきわたるように豚肉を切り分ける。このとき，その数に応じて不足なく豚肉を切り分けるには，事前に参加者の数を把握する必要がある。そのためには量詞tarina「たくさん」やtarina ro tarina「かなりたくさん」では情報として不十分であったと推測される。こうして絶対に不足を生じさせない程度の概数（ここでは60番目）が必要であったことから，このような不足を生じさせない数え方へと発展させた可能性が考えられる。

2．数え方の変化要因

ツツバ語の大きな数の数え方では，なぜオセアニア祖語や多くの近隣諸語の数え方と異なり，一つ上の序数を用いるのか。上記の伝統的儀礼が影響した可能性を考察する。

ツツバ語の数え方に序数が用いられる理由としては，以下の二つの可能性が考えられる。

可能性１．自生的変化：オセアニア祖語から早い段階で５＋１，５＋２のような数え方をする言語が現れたように，ツツバ語の数え方も，基数とdoman「加算」を用いる祖語と同じ数え方から，早い段階で序数を用いる数え方へと自生的に変化した。

可能性２．自生的ではない変化：祖語のように基数とdoman「加算」を用いて数えていたが，その後，参加者を「今30，次の40番目まで１人，２人…」と常に同桁の一つ上の数を念頭において数えるうちに，この数え方が定着した。

このうち，可能性が低いのは自生的な変化をしたとする1であると考えられる。数え方が言語の効率性に反して自律的にさらに複雑になった上，一の位以外の同位の基数と序数は，実際には同一の内容を意味するという余剰性がある。しかもツツバ語が文字や数字を持たない言語であり，音声が発話と同時に消失するという特性を有すると考えると，情報を受け取るにあたって聞き取らなければならない音声が増えることは，情報の伝達効率の上で合理的ではない。つまり言語の経済性の観点から，自生的にこの数え方になったとは考え難い。そのように考えると，儀礼により数え方が変化したと仮定を前提として，ツツバ語の話者が数え方を発達させたとする可能性２の方が，妥当性が高いと考えられる。このとき，頻度

は高くないものの１から20までの基数は日常生活の中で使用されることもあり，これらの数は，序数を用いる数え方へと変化した際にその影響を受けにくかったか，または影響を受けてもその数え方が人々に浸透しなかったと考えられる。

３．基点を上げる理由

例えば31人であれば「30　doman（加算）１」ではなく，40番目という表現を導入して「30，40番目まで今１人」や「30，40番目に向けて１人」のように，40という数を導入した理由には，文化的・心理的な背景が関与した可能性がある。

ヴァヌアツ共和国全土において豚は財産として扱われ，特に島民の多くが現金収入を持たないツツバ島において豚は何にも代えがたい宝である。豚の牙がヴァヌアツ共和国の国旗や紙幣に印刷されていることからも，この国における豚の価値が窺える。豚肉を食す機会は儀礼の時より他になく，ツツバ島の首長数や年齢構成，また結婚式の頻度を基に考えるとそれは数年に一度，あるいは一年に一度あるか否かといった頻度であったと推測される。こうした儀礼が行われる際には，この豚肉一片を求めて，島民が島の端々から集まり，車や自転車などの交通手段がない島では，徒歩でゆうに１時間以上かけてやって来る。これらの参加者すべてに豚肉の一片を行き渡らせなければ儀礼は成功とは言えず，仮に豚肉を得ることが出来ない人が現れたならば，新たに任命される首長への不満が高まることになる。

ツツバ島には10の首長の階位があり，より高い階位に就くためには，首長任命式においてより多くの豚を殺して島民にその肉をふるまわなければならない。自身の財を島民に多く提供すればするほど崇められる制度において，参加者への豚肉が足りないということは首長候補とその家族にとって避けるべき事態である。この点から参加者数を数える者は，数に対して相当な心理的負担を負っていたと推測される。ゆえに切り分ける豚肉の数に余裕を持たせるため，一つ大きな数を基点として加えた可能性が考えられる。つまり話者の視点は「50からさらに３」ではなく，「50，そして60番目まで今３」や「50，60番目に向けて今３」のように，「50」よりも重要となる「60番目」におかれた可能性である。また豚肉を切り分ける聞き手にとっても，肉が足りないという事態を防ぐことの出来る60という数のほうが50に比べ重要である。さらに仮に一の位が聞きとれなくとも，また忘れてしまおうとも，一つ大きな数が基点として伝えられている限り支障はない。すなわちこれは発話と同時に消えるという音声の性質と合致した，合理的な伝え方であるといえる。そしてまた数える者とその情報を受け取る者にとって，豚肉の不足に対する心理的負担や過度の余りを生じさせる事態に対する不安を軽減するうえで最適な数え方であったといえる。

なお，こうした心理的負担の軽減方法は，社会により異なることが予想される。科学技術や資材・原資・交通網に富む地では，負担を軽減するための道具・機器の開発および導入が可能である。また離れた地への連絡方法として携帯電話を使うことも出来る。他方ツツバ島のように文字・数字・電気・水道・ガス・交通網が無い社会では，同様の方法による負担軽減は不可能であり，言語や身体・自然など当社会に存在するものを利用または変化させる以外になかったのではないだろうか。

ツツバ島の人口は1989年には315人，1979年には238人，1967年には158人である[12),13)]。データが無いためそれ以前の人口は分からないが，現在よりも人口の少ない時にこの数え方へと変化し，当時は言及しなければならない百の位の数が限定されていたか，または十の位から数が始まっていたことも考えられる。その場合，重要となるのは十の位となり，数える者にとっても，また聞き手にとっても十の位の序数さえ把握できれば下一桁が把握できなかろうと儀礼を成功させる上では差し支えなかったであろう。現在より少ない人口であったことは，この数え方を発展させ，浸透させる上で重要であったと推測される。

結　　論

ツツバ語の21以上の，下一桁が０でない数は，オセアニア祖語や同系統の多くの言語とは異なり，doman「加算」を伴わずに基数と序数を組み合わせた数え方をする。このような数え方となった背景に関しては，これまでに仮説も含め考察がなされておらず，理由は不明であった。本論文ではこのような先行研究の乏しさや研究の余地を踏まえ，ツツバ島での長期の参与観察をもとに，大きな数が使用される場面およびツツバ島の文化と儀礼を調査した。そして，初めに以下の三点を明らかにした。

①儀礼や結婚式で，参加者数を数える時に大きな数が使用されること。②首長任命式において，豚を殺しその肉を人々にふるまう行為は，豚が財産であるこの地において十分な財力と寛大な心を持った首長に足る人間であることを示す手段であり，儀礼で重要視される行為であること。③儀礼の成功のためには参加者への豚肉の不足を生じさせてはならないという状況のもと，事前に参加者数を数える行為は豚肉を参加者全員に行き渡らせる上で非常に重要であること。

続いて，儀礼と数との相関を考察した。初めに，仮にこの言語が早い段階で「30　40番目　1」という数え方へと自生的に変化した場合について考察を行った。そして文化的背景，つまり参加者全員に豚肉が行きわたらせ

ることは儀礼成功のうえで不可欠であるという文化と心理が，この自生的変化の合理性を支持し，それゆえ序数を用いる数え方が保持されたと考えられることを説明した。また，儀礼文化に呼応して数え方が変化したのであれば，豚肉の不足を生むと儀礼の成功に関わるという心理的負担から，一つ大きな数を基点とする数え方へと発達させた可能性があることを説明した。つまり儀礼が人々の心理に影響を及ぼし，それが数え方に反映され，儀礼を経るにつれて広く人々の間に定着したとする可能性である。最後に，自生的変化と儀礼文化に呼応した数の変化は，どちらがより妥当であるかの考察を行い，音声の性質とコミュニケーションの経済性から，後者の妥当性が高いと考えられることを示した。

引用文献

1) Clark R (1985) : Languages of North and Central Vanuatu: Groups, chains, clusters and waves. In: Austronesian Linguistics at the 15th Pacific Science Congress. Pawley A and Carrington L (eds), p.199-236, Pacific Linguistics
2) Lynch J, Ross M, Crowley T (2002) : The Oceanic Languages. Routledge
3) Tryon DT (1976) : New Hebrides Languages: An Internal Classification. Pacific Linguistics
4) Early R (1993) : Nuclear Layer Serialization in Lewo. Oceanic Linguistics, 32, 1, 65-94.
5) Lynch, J (1998) : Pacific Languages: An Introduction. University of Hawai'i Press.
6) François A (2002) : Araki: A Disappearing Language of Vanuatu. Pacific Linguistics
7) Thieberger N (2006) : A Grammar of South Efate: An Oceanic Language of Vanuatu. University of Hawai'i Press
8) Guérin V (2011) : A Grammar of Mavea: An Oceanic Language of Vanuatu. University of Hawaii Press
9) Jauncey D (1997) : A Grammar of Tamambo: The Languages of Western Malo, Vanuatu. Doctoral Dissertation, School of Philosophy, Australian National University. Australia.
10) Camden WG (1979) : Parallels in Structure of Lexicon and Syntax between New Hebrides Bislama and the South Santo Language as Spoken at Tangoa. In Papers in Pidgin and Creole Linguistics. Mühlhäusler P, 2, p.151-117, Pacific Linguistics.
11) 内藤真帆 (2011) :「ツツバ語　記述言語学的研究」.京都大学学術出版会
12) The Republic of Vanuatu (1989) : Vanuatu National Population Census May. National Statistics Office.
13) The Republic of Vanuatu (1999) : Vanuatu National Population and Housing Census. National Statistics Office.

脚　　注

注1）論文で扱う略号は以下の通りである。1・2・3 一人称・二人称・三人称，cdn基数，class分類辞，poss所有者接辞，sg単数，-接辞，*祖語

注2）マヴェア語も序数を用いる数え方をするが，21から99の間の数であることを示す類別詞ngavを伴う，またngavul「10年間」に三人称単数の主語代名詞接辞mo-が付加して10の位の数が表されるなど，ツツバ語とは異なる点が多数ある。

要　　旨

南太平洋のヴァヌアツ共和国では，80あまりの島々で100を超える現地語が話されており，国民の多くは国語ビスラマ語に加えて，現地語の少なくとも一つを話すことができる。

本論文は，現地語の一つであるツツバ語の21以上の数が，基数と序数を組み合わせて表されることに着目し，その背景および要因を参与観察と聞き取り調査により分析・考察するものである。

はじめにツツバ語の数について紹介し，この言語の21以上の基数が，オセアニア祖語や同系統の言語とは異なり，基数と序数を組み合わせて表されることを示す。続いてこうした大きな数が，儀礼などのツツバ島の伝統において用いられていること，および儀礼で重要な役割を果たしていることを明らかにする。そして儀礼の成功と数がどのように結びついているかを説明し，数に対する話者の心理が数え方の変化と関係した可能性を示す。

謝　　辞

数多くのツツバ語話者の協力により，これらのデータを得ることが出来た。なかでも参与観察と聞き取り調査に積極的に協力して下さったVernabas首長とその家族，Eileen氏，Sara氏，Turabue氏，John氏，Delvin氏，Eles氏に深く感謝申し上げる。

本研究はJSPS科研費JP16H07139の助成を受けている。

利益相反

なし